

【ショートレター】

## 海外研修の知見を生かした国内での国際共修の可能性†

### —三重大学ベトナムフィールドスタディを事例に—

奥田久春\*・松岡知津子\*2

三重大学教養教育院\*・三重大学地域人材教育開発機構\*2

本稿は、大学の国際化の中で注目されるようになってきた国内での国際共修について、海外研修と対置させるのではなく、どちらも協働学習が可能であることに注目し、海外研修の知見を活用することの可能性を検討する。事例として三重大学の短期海外研修のベトナムフィールドスタディを取り上げ、その報告書から学生が学んだ内容を読み取り、国際共修で学ぶべき能力と照らし合わせることで、国内での実践の可能性を考察する。異文化間コミュニケーションに関しては国内での国際共修でも可能だが、異文化の状況を教室で創出することなど工夫が必要であること、国際的な視点や専門性の高い学びは国内の国際共修でも可能であること、海外研修に委ねるべき学びもあることが示唆された。

キーワード：国際共修、海外研修、ベトナムフィールドスタディ、協働学習、大学の国際化

#### 1. はじめに

大学の国際化が要請されて久しいが、各大学ではそれに沿ったカリキュラムの国際化やキャンパスの国際化が進められてきた。特に異文化間理解やグローバル人材の育成という社会的要請から、海外留学や学生交流が促進されている。その反面、日本人学生の内向き志向が指摘され、海外に出ることへの関心の低さや、治安への不安、経済的負担が阻害要因にもなっている（太田，2013）。

また一方では、大学教育においては、21世紀における学習観の転換からアクティブ・ラーニングやプロジェクト型や課題解決型のPBLが活発に行われるようになり、その中での協働学習が重視されつつある。こうした一連の流れの中で、国内の大学内において外国人学生と共に学ぶ国際共修が注目を集めている（米澤，2019）。この国際共修について、末松（2019）は次のような定義づけをしている。

言語や文化背景の異なる学習者同士が、意味ある交流（meaningful interaction）を通して多様な考え方を共有・理解・受容し、自己を再解釈する中で新しい価値観を創造する学習体験を指す。単に同じ教室や活動場所で時間を共にするのではなく、意見交換、グループワーク、プロジェクトなどの協働作業を通して、学習者が互いの物事へのアプローチ（考察・行動力）やコミュニケーションスタイルから学び合う。

この知的交流の意義を振り返るメタ認知活動を、視野の拡大、異文化理解力の向上、批判的思考力の習得、自己効力感の増大などの自己成長につなげる正課内外活動を国際共修とする。

この中では、国際共修の場を限定しているわけではないが、米澤（2019）が言及したように日本では国内の大学内での学びとして用いられることが多い。海外研修に参加せずともできる、大学内での異文化間交流による学びが国際共修の特徴である。

しかし、海外研修と国際共修を両極に対置させるのではなく、それぞれの実践を積極的に参考にすることで、より意義のある国際共修にすることが可能ではないだろうか。

例えば、水松（2019）は海外留学の効果を国際共修と対比させて検討している。そして海外研修が短期であっても、外国語能力や異文化間能力の向上が見られることを認めつつ、そうした研修に参加できない学生への学ぶ機会として国際共修が有効であることを述べている。

本稿ではこうした問題提起や先行研究をもとに、国内での国際共修を海外研修の代替、或いはそれ以上のものとするには、海外研修から何が学べ、何が学べないのかを検討していきたい。その事例として、三重大学で行われている短期海外研修のベトナムフィールドスタディ（以下、VFS）を取り上げる。

この海外研修プログラムは三重大学の大学間交流

協定大学であるホーチミン市師範大学と共同で実施しているものである。本稿では、2018年度の参加者による『2018年度ベトナムフィールドスタディ報告書』（以下『報告書』）をもとに、参加者がどのように感じたのか、どのような能力や態度、価値観を身につけたのか、そして、どういった限界があったのかを読み解き、国際共修での活用の可能性を探る。

水松（同）は海外研修と国際共修とを対比する上で、国際共修において学生が身につけるべきこととして、Leask（2007）の国際的視点を引用して説明しているが、本稿でもその視点に沿って学生の学びを分析してみたい。

Leask（同）は異文化の状況を活用した国際的な学習の場で、学生が身につけるべき国際的な視点として次の8点を挙げている。これらは国際化を進める大学のカリキュラムとして参考となるため、本稿の分析枠組みとして用いていきたい。

- 他文化の知識と文化的多様性への理解
- 専門分野での国際的な視野
- 社会的および文化的に多様な状況において効率的に働く力
- グローバルかつ様々な視点で問題を考える力
- 文化を超えたコミュニケーション力
- 専門的なことや私生活で異文化の人々と積極的に関わる力
- 国際コミュニティへの関心
- 自文化と異文化の視点がなぜ、どのように類似したり、相違したりするのかの認識

## 2. VFSの目的と内容

VFSは異文化にあって主体的に行動し、参加メンバーと協力しながら活動を進め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする、グローバル人材に求められる能力・資質を育成することを目的としている。具体的には大きく3つのプログラム内容から構成されている。1点目はホーチミン市師範大学におけるベトナム語と日本語の授業である。ベトナム語はベトナム人学生による授業の中で、ペアワーク、ゲームやロールプレイなどを通して共に学ぶ。また、同大学日本学部での日本語の授業や三重大学の引率教員が提供する授業に参加し、グループワークの中で日本語学習をサポートし、発表や実演、対話を通して日本文化を紹介する。

2点目はフィールド調査である。ベトナム人学生とグループを構成し、共に探究テーマや方法について話し合いながら情報の収集や調査を行い、最終日

に発表をする。今回は「保健医療の日越比較」、「食文化の日越比較」、「ベトナムの果樹栽培と水の利用」の3つのテーマで、日越を比較する内容となった。

3点目は戦争証跡博物館や歴史博物館の見学と水上人形劇の鑑賞といった文化体験であり、これもベトナム人学生と一緒に訪問するものである。またこれ以外にも昼食などを共にすることで交流に繋がった。これらは、ベトナム人学生に案内されたり教わったりするのではなく、ベトナム人学生にとっても自分たちの文化や歴史を学ぶ機会になっている。

このように、全ての活動がベトナム人学生と協働することを中心に進められ、双方の学びの経験になっている。このことで、あらかじめ決められたプログラムに参加するだけの「受け身」の姿勢になることや日本人やベトナム人同士で固まって行動することを防いでいる。これはベトナムという異文化にて双方の学生の興味関心に沿って、コミュニケーションを意識しながら、双方が主体的な学びを進めることを狙いとしているためである。グローバル人材に求められる能力・資質を育成することを目的とする、いふなれば、国際協働学習であり、ベトナムにおける国際共修といってもよい。

なお、2018年度の参加者は5名で、2年生が1名、1年生が4名であった。また、女性が3名、男性が2名であった。日程は2019年3月10日から19日までの10日間である。またホーチミン市師範大学側の参加学生は主に10名であり、日本語能力は高い者から初心者まで多岐に亘る。

## 3. 学生による学び

### 3.1 『報告書』から見る学生による学び

本節では『報告書』から学生による、ベトナム語の授業、日本語の授業で学んだこと、フィールド調査、そして学生交流や全体的なことへの感想を引用し、Leask（同）の8つの国際的視点に繋がる箇所を抽出していく（下線は筆者による）。

#### 3.1.1 ベトナム語・日本語学習

「教えるだけ、教えてもらうだけで終わるのではなく、日本のことを伝え、ベトナムのことを学べるという、これこそが交流だと感じました」

- 他文化の知識と文化的多様性への理解

「自分の国の言語ではない言語をしゃべるとき豊富なボキャブラリーはもちろん大切ですが、失敗を恐れず伝えようとする気持ちがコミュニケーションの

第一歩であると感じました」

- 文化を超えたコミュニケーション力

「ベトナムの学生が何を伝えたいのかわからないときや、逆に自分の伝えたいことが伝わらないときがあり、困ったときもありました。しかし、お互いにジェスチャーや絵を駆使してコミュニケーションを図りやっとの思いで伝わったときは達成感を感じるとともに心が通った感覚がしてとても嬉しい気持ちになりました」

- 多様な状況において効率的に働く力
- 文化を超えたコミュニケーション力

「授業では、日本にいて、日本人としかかかわらない日常では得られない、ベトナムにいるからこそその体験ができました。日本のことを紹介することが思いの外難しく、思い通りにいかず悔しい思いをしました」

- 自文化と異文化の視点が相違する認識
- 多様な状況において効率的に働く力

### 3.1.2 フィールド調査

「フィールド調査でのディスカッションは、日本語学科の学生さんなので、基本的には日本語で行いました。しかし日本語の微妙なニュアンスや難しい単語は（中略）なかなか伝わらないし、（中略）何度ももどかしい気持ちになりました」

- 多様な状況において効率的に働く力

「初めて、相手の方に思いを伝えたい、相手の方がこんなによくしてくださったから、恩返しをしたい、という気持ちで、言語を習得したいという思いが芽生えました」

- 私生活で異文化の人々と積極的に関わる力

「日本では当たり前のことが当たり前ではなかったりすることを知れて、面白かったです。うまく意思疎通ができないときもありました。しかし、言葉を言い換えてみたり、例を出してみたり、伝えようとしてくれること、伝えたいことをお互いが理解していく、わかりあえた時はうれしいと思うと同時に且には見えない絆のようなものを感じました」

- 多様な状況において効率的に働く力
- 文化を超えたコミュニケーション力

「私たちがいる場面ではなるべく日本語を話して私たちにも分かるように努めてくれた。（中略）ベトナムに行ったのにちょっとした挨拶や、ぎこちない自己紹介しかできないのはもったいないと感じた」

- 私生活で異文化の人々と積極的に関わる力

### 3.1.3 学生交流, その他

「日本とベトナムの文化の違いの面白さにも気づきました。特に食文化での違いについてです」

- 自文化と異文化の視点が相違する認識

「今回の研修でベトナムの方々に温かく接していただけたことは、私の中でとてもありがたく（中略）大学内や街で出会う外国の方と、こちらから勝手に壁を作るようなことはしないで、積極的に声をかけたり、困っている様子であれば手をさしのべたりしたいと思います」

- 私生活で異文化の人々と積極的に関わる力

「ベトナムという国が心から好きになりました。日本とは環境や文化が違うところが多いので、車で移動している間に目に映るものすべてが新鮮で楽しかったです」

- 自文化と異文化の視点が相違する認識

「戦争証跡博物館の訪問によって、改めて戦争の恐ろしさを再認識し、我々のような若い世代が二度とあのような悲劇を起こさないようにしていくという意識が大切であると強く思いました」

- グローバルな視点で問題を考える力

## 3.2 考察

このように学生の報告内容に多く見られるのは「文化を超えたコミュニケーション力」であろう。これに、授業やフィールド調査とともに自由時間での交流から「専門的なことや私生活での異文化の人々と積極的に関わる力」「社会的および文化的に多様な状況において効率的に働く力」に繋がる学びが加わっていると捉えることができよう。また全体を通じて「他文化の知識と文化的多様性への理解」「自文化と異文化の視点がなぜ、どのように類似したり、相違したりしているのかの認識」が深まっていたり、「グローバルかつ様々な視点で問題を考える力」が萌芽していることも読み取れよう。

これらは国内での国際共修においても、留学生との対話や発表による言語や文化の紹介など実践が可

能だと考えられる。しかし双方が知識の習得に終わらず、海外研修のように授業外でも行動を共にし、留学生の普段の生活習慣まで学べるように工夫することで更に効果が期待できるのではないだろうか。

また、日本で当たり前のことを海外で伝える困難さを痛感し、克服しようとする経験に注目しておきたい。これは「社会的および文化的に多様な状況において効率的に働く力」「自文化と異文化の視点の相違、どのように類似したり、相違したりしているのかの認識」に繋がる学びだと考えられる。ベトナムでは日本人学生の文化は異文化であり、日本の生活空間に頼ることはできない。自分で伝えられない相手には伝えられないからである。これらの学びはまさに海外研修の強みであろう。国内での国際共修でこれらを実践するためには、例えばベトナムの社会規範や行動様式・文化的価値観や習慣が主流であるという「場」を教室内で創出しなければならない。

また「温かく接して」くれた人との交流、見たり食べたりという五感を通じた異文化理解やベトナムという国が好きになったという思いを得るには海外研修が適しているかもしれない。その部分は海外研修に委ねることも必要であろう。

一方で、「専門分野での国際的な視野」「国際コミュニティへの関心」は、今回の報告書からあまり明確には読み取れなかった。これは専門科目を履修する研修ではなかったことや、ベトナム人学生との交流だけでは国際コミュニティという視点は持ちにくいことによると考えられる。逆にこうした能力は国内での国際共修で身につけられる可能性が高い。そのためには多様な出身国からの留学生との学びの機会を設け、専門課程においても国際共修が行われ、学生が国際社会に関する知識を留学生とともに学び、それぞれの価値観から議論ができる授業が必要と考えられる。

#### 4. まとめ

本稿では、海外研修の VFS を事例として国内での国際共修の可能性を検討してきた。上述したとおり、海外研修では文化を超えたコミュニケーションのあり方、私生活でも異文化に関わろうとする姿勢、多様な状況で働けること、自文化と異文化の視点の相違やグローバルな視点について学べるというよいであろう。しかし現地で学んだという感覚以外は国内での国際共修でも代替可能だと考えられる。但し、効果を更に期待するためには、国内の留学生との交流を生活空間に拡張したり、異文化が主流であると

いう「場」を設定したりするなどの工夫が必要になるだろう。

一方で、今回のようなコミュニケーションを中心とした二文化間での海外研修では、専門分野での国際的な視野や国際コミュニティについて学ぶには限界があった。むしろ様々な国・地域からの留学生と学びあう国内の国際共修の方で学べる可能性が高い。

これらをうまく組み合わせ、国内での国際共修を工夫しつつ、将来的に海外研修を視野に入れるような学びを検討してしてもよいであろう。

今回は VFS に限ったが、短期海外研修といっても様々なものがある。今後は様々なケーススタディを積み重ね、更に先行研究や理論も踏まえて考察を深めていく必要があるだろう。

#### 参考文献

- 太田浩 (2013) 「日本人学生の内向き志向再考」 横田雅弘, 小林明編『大学の国際化と日本人学生の国際志向性』学文社, 67-93.
- 末松和子 (2019) 「はじめに」 末松和子, 秋葉裕子, 米澤由香子編著『国際共修 文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ』東信堂.
- 三重大学国際交流センター (2019) 『2018 年度ベトナムフィールドスタディ報告書』
- 水松巳奈 (2019) 「海外留学の効果との比較から考える国際共修の可能性と課題」 末松和子, 秋葉裕子, 米澤由香子編著『国際共修 文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ』東信堂, 45-63.
- 米澤由香子 (2019) 「国際共修：開発と発展の背景」 末松和子, 秋葉裕子, 米澤由香子編著『国際共修 文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ』東信堂, 4-8.
- Leask, B. (2007) International teachers and international learning. In Jones E., & Brown S. *Internationalising Higher Education*, Routledge, 86-94.

---

†Hisaharu Okuda\* and Chizuko Matsuoka\*<sup>2</sup>: A Possibility of Intercultural Collaborative Learning using an Experience of Training Abroad Program

\*College of Liberal Arts and Sciences, Mie University 1577 Kurimamachiyachou Tsushi, Mie, 514-8507 Japan,

<sup>2</sup>Organization for the Development of Higher Education and Regional Human Resources, Mie University 1577 Kurimamachiyachou Tsushi, Mie, 514-8507 Japan